

ナチュラルキス
新婚編 3

S a b o k o & K e i s b i

風

fuu

ternity



エタニティ文庫

Contents

ナチュラルキス
～新婚編3～ 5

啓史 side 253

書き下ろし番外編
日々前進 341

ナチュラルキス
～新婚編 3～

1 思いがけぬ歩み寄り

身体を揺すられていた感覚に、佐原沙帆子は目を覚ました。
う……ん？

目を開けた瞬間、ドクンと心臓が跳ねた。
わわっ！ 佐原先生に、見つめられてる。

彼は佐原啓史、沙帆子の夫だ。彼女の通っている高校の教師で、沙帆子のクラスの副担任でもある。ふたりは、一週間前に結婚したばかりだ。

「目が覚めたか？」

「は、はい」

焦って返事をしつつ、がっかりしてしまう。

あーあ、また今日も、先生より先に起きられなかった……

「残念だったな」

ぎ、残念？

心で思っていたことを口に出されてしまい、どきりとする。だが、心を読まれたわけではないはず。ならば、何をもって残念だと言っているのだろうか？

「あ……残念って？ あっ、それより、いま何時なんですか？ 起きて支度しなくても大丈夫ですか？」

「ああ、まだ余裕がある」

確かに、啓史もまだ寝間着姿だ。

毎朝起こしてもらってばかりいたけど、これまで彼はいつも着替えを終わっていた。

そう考えて、鼓動が速まる。

朝のパジャマ姿の先生だ！

先に起きることはできなかったけど、これぞ新婚さんの朝って感じかも。

あーっ、できることならば、寝起きの先生の写メ撮りたい。

啓史は横向きに寝そべり、片肘をついて頭を支え、仰向けになっている沙帆子を見つめている。

新婚さんなんだし、ぎゅっと抱きついちゃってもいいんじゃないかな？

そ、それで……おはようのキスとか……しちゃったり。

きゃはーっ！

「せっかく……」

甘い妄想もつろをしていた沙帆子は、啓史の言葉に我に返った。
うん？ せっかくって？

「はい？」

「昨日一日、猶予ゆうよをやったのに……」

「あの……猶予ゆうよって、なんのことですか？」

啓史が何を言っているのか、意味がさっぱりわからず、沙帆子は聞き返した。
すると啓史は、沙帆子の耳たぶみみを摘つまんできた。やんわりとなら胸きゅんものだが、ぎゅつと力を入れて摘つままれてるんじや、甘さの欠片かけらもない。

「一昨日、チャンスをやると言っただけ？ 思い出せないのか？」

「お、一昨日？」

耳を摘つままれたまま、沙帆子は眉を寄せて考え込む。

一昨日ってというと、ホワイトデーだ。先生と海岸沿いのレストランでディナーを食べたんだ。そして、そこから帰る間に、砂浜で夜の散歩をして、ホワイトデーのお返しに、キャンディまでもらって……

思いもよらない、ロマンティックな夜を過ごしたっけ。

「どうだ？ 思い出したか？」

彼女の耳たぶをくいくい動かしながら、啓史が答えを催促せまする。

沙帆子は「ま、まだ」と焦りあせつつ返事をし、また続きを考え込んだ。

帰ってくるるとき、わたし、車で寝てしまっ……家に着いてから起こされて……

「お前……ほんとに覚えてないのか？」

啓史は沙帆子の耳たぶを離し、呆れ返あきれったように言いながら起き上がった。

沙帆子も慌あわてて起き上がる。

「だから、あの、何を？」

「最後のチャンスをやると言っただけ？」

「最後のチャンス？」

やはり、意味がわからぬまま言葉を繰り返した沙帆子に、啓史は「ああ」と答える。

最後のチャンス？ あれっ？ ……なんとなく、覚えがあるようなないような？

ええーっ？ 沙帆子は眉を寄せて考え込んだ。

「お前は今夜、俺的に楽しい目に遭あうことに決まった」

啓史は、試すように口にする。

「は、はいっ？」

楽しい目？ 先生的に？

「あっ！」

沙帆子の表情を見て、啓史がにやっとならう。

「ようやく思い出したようだな?」

そうだった。佐原先生から、外では『先生』と呼ばないようにと注意されて、『啓史』と呼ぶように言われたんだ……けど、どうしても呼べなくて……そうしたら、最後のチャンスやるって言うてくれて。明日の夜まで延長してやるから、使い分けできるように頑張ってみろって……なのに、すっかり忘れてた。

「先生、そのこと、あれから一言も……だから……」

「忘れていたのはお前の失態だ。俺がどうかは関係ないんじゃないか?」

そ、そう言われると……確かに、先生に文句を言うのは筋違いかも。でも……そうなるかと?

わたしは先生的に楽しい目に遭わされる……って、言ってたような?

つまり、これはとてもまずい状況ってことだ。

「ほら、もう起きるぞ。今日は余裕をもって出られそうだな」

沙帆子は、ベッドから下りようとする啓史に思わず縋りついた。

「ま、待ってください」

「なんだ?」

啓史は眉を寄せて振り返ってきた。

「あ、あの……一応、聞いておこうかなあと思うんですけど……せ、先生的に楽しい

目って、いったい……あの?」

「聞くのか?」

真顔でにじり寄りながら聞かれ、胃のあたりがひよつと跳ねる。

『はい』とは領けず、「い……いえ……」と顔を強張らせて否定してしまう。

「なんだそうか。それじゃ、起きて支度だ」

そう言い残し、啓史はすたすたと寝室から出ていく。

「せ、先生い」

追い縋りたいけど……かといつてはつきり聞くのも怖い。

あーん、もおつ。先生的に楽しい目って……今夜わたしは、いったいどんな目に遭うの?」

先生的にすることはわたしにとつては楽しくない可能性が高い。というか、そうしか考えられない。

わたしが嫌で、先生が楽しむっていったら、いたぶりくらいしか思いつけない。

ああつ、ま、まさか……

過去の記憶をさぐった沙帆子は、ある出来事を思い出して青くなった。

まさかまた、死ぬほどくすぐられるんじゃない?

あれは嫌だ。あれだけは絶対止めてほしい。

ベッドの上で身悶みもたえていたが、すでに啓史が寢室から出て行つてかなり経たつてしまつている。

い、いけない！ 悠長ゆうちやうに考え事ことなんてしてられない。早く、朝の支度しだくしなきゃ……沙帆子はベッドから飛び降り、寢室を出た。洗面所に入り、慌あわててパシヤパシヤと顔を洗い、タオルで拭ふきながらクローゼットの部屋を開ける。

部屋の中に啓史がいて、なんと、スーツのズボンを穿はいている真まつ最中さいちゆうだった。

「あ」

一声あげたまま、沙帆子は数秒固かたまった。彼女が固かたまっている間に、啓史は平然とズボンを穿はき、シヤツの裾すそをズボンに入れ、ベルトのバックルを留とめる。

「どうした？」

ベルトから手を離し、啓史が尋たずねてくる。その瞬間、心臓がとんでもなくバクバクし始めた。

ど、どうしたつて……それは、不可抗力ふかこうりよくとはいへ、ズボンを穿はいておいでのところを見てしまったからで……

「あ、あ、あの……」

啓史はネクタイとスーツの上着を手にし、ドア口に突つ立たつて立たっている沙帆子に歩み寄よつてきた。ドキリとしたが、頭にボンと手を置かれる。

「俺はもう終しまえたから、お前も早く着替かえろ」

そう言いながら、部屋の中に沙帆子を入れ、啓史はドアを開めて行いってしまった。

頭の上に手のひらをやり、沙帆子はようやく正気せいせいに戻かえった。

「あわわわわ」

泡あわを食くつて叫こゑび、その場にしゃがみ込む。

さ、さ、佐原先生が、ズボンを穿はいているところを見てしまったなんて……

物凄ものぞとく悪いことをした気分になるのは、どうして？ 先生はわたしの夫おとこなんだから……夫の着替かえる場面まへを妻つまが見たから……どうつてことない……つて！

「どうつてこと、あるしっ！」

思おもわず口に出して叫こゑんでしまう。

いまさら顔に血ちが集あまり、かーっと熱あつくなってきた。

あー、やっぱりまだまだだ、わたし。佐原先生はわたしにとつて教師で、自分は生徒という意識いしきなんだよね。だから、先生を『啓史さん』だなんて、おこがましく呼よべないんだ。

名前なを呼よべなかつたおかげで……なんか、とんでもない目に遭あわされることになつちやつて……

でも、これはしつかり自覚じかくしろつてことなんだ。佐原先生とわたしの結婚けっこんがばれたら、

大騒ぎになってしまふ。先生も教師を辞職することになって、わたしも退学に……いくら、学校長が啓史の伯父おじであつても、騒ぎになつたら、周りに迷惑をかけないためにも、ふたりは学校から去るべきだ。

沙帆子は唇をぎゅっと引き結び、大きく頷うなずいた。

しつかり使い分けられるようにならなきゃ。不用意に『先生』なんて呼ばないようにしよう。

おこがましい気がして呼べないなんて、甘いことを言つてちゃダメだ。

さて、名前で呼ぶことについては決意をしたけど……

先生的に楽しい目に遭あうのを、みすみす待つなんてしたくない。

沙帆子は急いで制服に着替え、エプロンをつけながら居間に駆け戻つた。

「先生！」

居間に入つて呼びかけたが、啓史がいない。

「なんだ？」

キッチンの方から声がし、沙帆子は視線を向けた。啓史が冷蔵庫の前に立っている。

「あつ、朝食はわたしがすぐに作りますから」

沙帆子は慌あわててキッチンに入った。

「飲み物の準備とパンを焼くくらいは俺がやる。お前は弁当を作ってくれるか？」

「わかりました」

すぐに取りかかろうとしたら、啓史が「沙帆子」と呼びかけてきた。

「はい」

「お前は、どうする？」

「はい？ どうするって？」

「学校が終わつたら、榎原えのほらの家に、先に……行くか？」

沙帆子の瞳を覗き込むようにして、啓史は問いかけてきた。

行くか？ そつか、もう『帰る』じゃないんだよね。いまのわたしの家は、このマン

ションなんなんだもの。

「はい。荷物の片付けとか、手伝いが欲しいかもしれないし……わたし、先にアパートに行つときます」

「そうか。わかった。……お前、飲み物は何がいい？」

「牛乳にします」

「了解」

啓史はテキパキと動き始め、沙帆子も弁当作りに取りかかった。

な、なんかいいかも。

啓史と向かい合って朝食を食べながら、沙帆子は満足の吐息をつく。

こうして落ちていて先生と朝ご飯を食べられるなんて……最高にしあわせだ。そのとき啓史がカップを持ち上げた。思わず笑みを浮かべてしまう。

やっぱりこのカップ、佐原先生に似合っていないな。水色のハート柄なんかも。もちろんわたしのカップは、それと色違いのピンク。

これは友人の飯沢千里と江藤詩織から結婚のお祝いにもらったものだ。趣味ではないに違いないのに、先生は文句も言わずに使ってくれている。それが嬉しい。

こんなことをのんびり考えて、いまという時を味わっていられるのも、時間之余裕があるからだよね。結婚してからこっち、余裕を持って起きられなくて、バタバタ駆け回って支度して、車に飛び乗ってばかりいた。

今日は六日目か……先生と暮らし始めて……六日経ったんだ。

そして今日は、佐原先生の授業を受けられる最後の日。……やっぱり寂しいなあ。

「どうした？」

しゅんと萎れていたなら、それに気づいたららしい啓史が声をかけてくれる。

寂しい気分が一瞬にして晴れてしまった。ふふっ、わたしってば、ほんと単純だ。

「うん？」

肩を落としていた沙帆子が、嬉しそうな表情になったので、啓史を戸惑わせてしまっ

たらしい。

「先生の授業が、今日で最後だったこと考えて……」

これからずっと、先生の側にいられるんだから、寂しいと思わなくてもいいんだなって思い直したとは、照れくさくて続けられない。

「そうだな……まあ、これからは家で勉強を見てやれるしな」

和んだ眼差しとともに、そんなお言葉をいただきたいが……鬼のカテキョーの再来は勘弁してほしい。もちろん、面と向かってそんなことは言えず……

「は、はい。お願いします」

つい、へこへこしてしまう自分が哀しい。

「ああ。任せておけ。次は十番くらい順位を上げるつもりで、挑むとしよう」
はいっ？。じゅ、十番？。い、いや……ないない、それはない！

十番順位を上げるということは、十八番以内ってことだ。今回、三十番も上げられたのは、もう奇跡のようなもので、そこからさらに十番も上げるだなんて……絶対無理だし！

だが、そんなことを口にしたなら、『最初から諦めるな！』と、お目玉を食らうに決まっている。

「それで、まだ褒美のお願い事とやらは決まらないのか？」

コーヒーを口にしながら聞かれ、トーストを頬張っていた沙帆子はくくと頷いた。成績を上げたご褒美に、なんでもひとつ言う事を聞いてくれるという約束をしているのだ。白衣姿でぎゅっと抱きしめてもらおうかと思っただけど、いまだ車に押し込められているでかうさ——巨大なピンク色のウサギのぬいぐるみ——の事を考える
と……あの子を救ってやるべきかとも思い、迷ってしまっている。

「なんなら、俺的に楽しい目に遭うって話、それでチャラにしてやってもいいぞ」

「そ、そんなの嫌ですよ。成績、三十番もアップしたご褒美なのに、そんなのとチャラじゃ、割に合いませんよっ！」

唇を尖らせて言い返す。

「まあ、そうか」

苦笑している啓史を見て、沙帆子は思案する。

せっかく最後のチャンスをもたらったのに、うっかり忘れて、ふいにしちやっただよね。もう一度チャンスをくれないか、ダメもとで頼んでみようか？

「あの、先生？」

「なんだ？」

目を合わせるが、どうにも頼みごとを口に出せない。焦った沙帆子は視線を外して、言葉を探す。

「あ、あのお……いったいどんな目に遭わせるつもりで？」

「なんだ、やっぱり聞くのか？」

澄まして問いかけられ、頬がヒクつく。

「あ、あの……お願いですから、くすぐるのだけは止めてください」

両手を合わせて頭を下げる。すると、啓史はくいつと眉を上げる。

「なんとか、ここで頼み込まなきゃ。」

「あ、あれ、ダメなんです。息が出来なくなって、笑い死にしちゃいます」
必死に懇願する。

「そんなにダメなのか、くすぐられるの？」

「はい、ダメなんです」

沙帆子は頭を大きく上下に振り、きっぱり言う。

「ふーん。なら、くすぐるのもいいかもな」

「へっ？ そ、それって……」

「候補には入っていないかったんだが……せっかくだ、入れといてやろう」

「は、はいーっ!？」

「そ、そんな。そんなつもりで言ったんじゃ……」

こうなりや、破れかぶれ、ダメもとで頼み込むしかない！

「名前を呼ぶチャンス、もう一日だけ猶予を下さい。お願いします！」
テーブルに両手を置き、勢いよく頭を下げる。

「はあっ？」

不機嫌ふみげんそうな声に一瞬怯ひくんだ沙帆子だが、勇気を振り絞って啓史に立ち向かう。

「だって、昨日一日忘れちゃってたんですよ。呼べるようにトライすることがこの場合重要なのに、忘れたままで終わりだなんて、そんなのおかしいですよ！」

言いたいことを言ったはいいが、言い終わった途端とたん後悔が湧いてきた。

「……」

啓史は無言で沙帆子を見つめ返す。

こ、これは、いたぶり確定？ い、嫌だ……視線が痛い……先生、なんか言って！

「それもそうだな」

沙帆子は思わず目を見開いた。いたぶられると思ってたのに、思いがけぬ歩み寄りの言葉。

「む、無効にしてくれるんですか？ もう一日チャンスをもらえるんですか？」

「十回だな」

「じゅ、十回？」

「今日中に、十回名前を呼べたら、なかったことにしてやろう」

うわーっ、十回は多すぎる。一回にしてくれないかな。

「ただし……」

「はい？」

「わかってるだろうが、自然な流れで呼べよ。感情のこもっていない機械的な呼びかけじゃ、回数に入れないからな。……いや、そんな呼び方したら、逆に回数が増えると思えよ」

ぴしゃりと言われ、顔が引きつる。

先生の言う通りなんだけど……自然に呼ぶのは簡単じゃないんだもの。でも、そんなこと言っていられないよね。呼べるようにならなきゃいけないんだもん。

よしっ、頑張ろう！

2 伝えたい言葉

教室に向かってとほとほと歩きながら、沙帆子のため息をついた。無謀むぼうなトライをしたおかげで、啓史の名前を呼ばなければならぬ回数が、結局十五回まで増えてしまった。

焦るからいけないのよ。けけけとか、引つかかるから……
もおっ、わたしの馬鹿あ〜。自然にと意識すればするほど、機械的な声になっちゃっ
て……

でも、どうしてもうまいこと呼べないのだ。

今日中になんて、もう絶対に無理。このままじゃ、なす術なく、くすぐりの刑に遭っ
ちやいそうだ。それだけは、嫌だ。なんとかしないと……

顔をしかめて考え込みながら、沙帆子は教室に入った。千里も詩織もすでにいて、ふ
たりして歩み寄ってくる。

「おはよう」

「沙帆子、おはよう」

「詩織、今朝は早いね」

「まあね。ママの機嫌が最悪でさ、今朝は、さっさと家を出てきたんだ」

「そうか……詩織、昨日の面談で、成績が悪くてお母さんが怒ってたっけ。」

「昨日は大丈夫だったの?」

眉を寄せてそう聞くと、詩織が首を横に振る。

「すでに心の底から反省してんのにさ……これ以上どう反省しろってのよ」

唇を突き出してブツブツ言った詩織は、気分を変えようとしてか表情を明るくし、沙

帆子に向けて口を開いた。

「で、沙帆子はどうだったのよ?」

成績を落とした詩織に、最高によかったとは言いがらい……

「よかったんだ?」

「う、うん、まあ」

詩織に申し訳なくて曖昧に頷くと、詩織が笑って抱きついてきた。

「もおっ、沙帆子ってば、わたしに気を使うことないよお。よかったなら、素直に喜ん
で自慢しなっつて」

沙帆子が頷くと、詩織はにっこり微笑んだ。その笑みが、じわっと心に沁み、思わず
目が潤む。

詩織ってば……ほんと、いい子だなあ。

「沙帆子、頑張ったもんね。詩織も沙帆子くらい頑張れば……」

「沙帆子と比べられちゃ困るよ。なんせ、沙帆子には、すっごい頑張りがいのある、素
敵なカテキョーがついてたんだもん」

い、いや……先生が素敵という言葉に反論はないのだが……

すでに何度も言っているが、カテキョーとしては鬼であってだね……詩織君。

「あらっ、榎原さん、家庭教師がいるの?」

すぐ側にいたクラスメイトが、いまの話を目にしたらしく、勢いよく割り込んできた。

「素敵なカテキョーって、大学生なの？」

「もちろん、男のひとなんでしょ？」

目をキラキラさせたクラスメイトに囲まれてしまい、沙帆子は焦った。

「女よ、女」

千里がそっけなく言う。

「なんだ、女のひとなの？」

「素敵なやつから、てっきり。もおつ、江藤さん、期待させてえ」

「ど、どうも、すみません」

千里ほど冷静な役者になりきれない詩織は、笑顔を引きつらせて、へこへこ頭を下げる。

「ねえ、わたしちいま、佐原先生のことを話してただけど……」

さ、佐原先生のこと？

「佐原先生が何？」

これまた冷静に千里が問う。

「もちろん、結婚が真実なのかってこと」

「やっぱり嘘なんじゃないかって思うのよね」

「そんなことはないんじゃない。熊谷先生も、結婚したのは本当のことだって言ってたし」

「だから、熊谷先生も話を合わせてるのかもしれないって」

「そんなことはないんじゃないの」

千里は否定するが、クラスメイトは千里の意見を受け入れようとしめない。

「佐原先生、バレンタインデーのとき、チョコ持った女子生徒たちにかなり困らされたみたいなのよ」

「だからさ、もう騒がれるのが嫌で、結婚したってことにしたんだとは思わない？」

彼女たちの目には、強烈な期待がある。そうであってほしいという……

沙帆子は、胸がツクンと痛んだ。

「わたしは、そんなことで嘘をついたりしなと思うけど」

「ええーっ！」

千里の言葉に、いつせいにブーイングが上がった。

「もおつ、飯沢さんはいいわよ」

「そうそう、あんな素敵な、公認の彼氏がいるんだもん」

彼女たちは揃って頬を膨らませ、腰に両手を当ててブーブー言う。千里の彼氏は、生徒会長の森沢大樹だ。

「否定はしないわ」

千里は照れもせず、あつさりと言つてのけた。集まってきたクラスメイトたちは一瞬^{あけ}呆気にとられた顔になり、次の瞬間、全員揃って噴き出した。

そのとき、始業のベルが鳴り出した。

沙帆子は急いで自分の席に着いた。ほどなく担任の熊谷がやってきてホームルームが始まり、そのあとすぐに一時間目の授業に入る。

それにしても、やっぱりみんな、佐原先生の結婚は嘘だと思つて……いや、嘘だと思いたいんだ。

森沢君も言つてたっけ……真実として受け止めている奴は少ないつて。色んな噂が好き放題に飛び交つて、みんな半信半疑だと。

啓史は指輪を嵌めたままだが、それも意味はないのかもしれない。

もちろん、わたしは外さないでほしいけど……

黒板を背にしている教師が冗談を言い、教室が笑いで沸いた。

沙帆子は生徒である自分を強く意識してしまふ。こんなふうには、制服を着て授業を受けていると現実味がどんどん薄れていく。

佐原先生と結婚して一緒に暮らしていること、両親がもうすぐ引越していくことすらも……

沙帆子はふと、自分の胸元に手のひらを当てた。ぐっと押さえると、硬いものに触れる。

ふたつの指輪……婚約指輪と結婚指輪。

結婚は現実だよな！

胸の内強く^{つぶや}呟き、沙帆子は周囲にゆっくりと視線を回した。

学年末で、すでにどの授業もカリキュラムを終え、消化授業となつていく。

高校二年生も、もうすぐお終いなんだよな。

そして、佐原先生の授業も……ほんとに今日までなんだ。

ひどく寂しさを感じる。白衣姿で授業をする佐原先生を、わたしはもう見られなくなるんだ。

三時間目が終わり、沙帆子は気持ちの高ぶらせながら、化学室に向かう準備を始めた。いよいよだ。佐原先生の最後の授業……

忘れ物のないように確認して立ち上がり、千里と詩織の準備が整うのを待つ。

ふたりは、そんなに待つことなくやってきた。

「最後だね」

廊下を並んで歩く千里が、しんみりと言う。沙帆子は胸がきゅんとしてしまふ。

「なんか、残念だなあ、佐原先生の授業が今日で最後なんてさ」

「化学は苦手なくせに」

「それとこれとは別だよ」

千里と詩織のやりとりを、胸を切なく疼かせながら沙帆子は微笑んで聞いていた。すると、千里が顔を向けてきた。

「ねえ、沙帆子、今日、わたしの家に来ない？」

「えっ、今日？」

「うん。だって、あんた土日も忙しいんでしょ？全然ゆつくり話せてないし……わたしの家でなら、気を使う必要もなく話ができるでしょう？」

わたしも、ふたりと気兼ねなく話をしたいけど……

結婚式のこと、まったく話せていない。

あの日のふたりのドレスのこととか、ふたりにもらったカップを毎朝使わせてもらっていることとか……それから、結婚式の夜に泊まったお城のような建物のこととか、先生にお姫様抱っこされたこと……ディナーのご馳走のことや、先生と夕暮れの散歩をしたことも……

そこまで考えたところで、ある記憶が蘇り、沙帆子はハッとした。す、すっかり忘れていた。わたし、あの日、超有名人と遭遇したんだった。

あの話ができると思った次の瞬間には「お邪魔するっ！」と勢いあまって返事をしていた。

人気俳優のトウキと会ったって聞いたなら、ふたりともびっくり仰天するに違いない。うわーっ、なんで忘れてたんだろう？ 思い出したら早く伝えたくてたまんない。

「啓ちゃん、いまは自分の部屋だろうし、歩きながらメールしたら？」

「あっ、うん」

急いで携帯を取り出し、メールを打とうとした沙帆子は、千里のほうを向いた。

「うちじゃダメかな？」

「うち？ 『うち』 って……ま、まさか、沙帆子、啓ちゃんどこ？」

激しく反応したのは詩織だった。『うち』と言ったのを、啓史の自宅のことだと思っ
たらしい。

「ちっ、違う。そっちじゃなくて」

「お邪魔していいの？ 美美子ママ、引越越し前で大変だったりしない？」

千里の問いに、沙帆子は首を横に振った。

「う、ううん。まだぜんぜん。昨日も荷造りとか、まだしてる感じなかったし」

「ああ、昨日は美美子ママと、アパートに帰ったんだ」

昨日は、四日に分けて行われる三者面談会の初日だった。三人とも昨日、面談を終え

ている。沙帆子は面談を終えたあと、芙美子の車でアパートに戻った。

「うん。引越すまで、夕食一緒に食べることになってるの」

「そうか。……あともう少しだもんね?」

ちよつと胸が詰まり、沙帆子はぎこちなく「うん」と返事をした。

「沙帆子」

沙帆子の肩に、千里が手をかけてきた。そして、やさしく笑む。

「ゆっくり変化に慣れてほしいよ。それに……あんたしあわせでしょう?」

千里の言葉は、胸に強く響いた。

その通りだ。生活の変化に、気持ちは不安定になりがちだけど……それでも……

「うん」

沙帆子はふたりに向けて微笑み、芙美子にふたりを連れて行くとメールを打った。

「ほら、化学室に着いたよ」

詩織が興奮したように言う。それに応じて、千里が頷く。

「いよいよ最後の授業ね」

「なんか、やっぱり、超苦手科目であっても、凄く寂しいや」

詩織の言葉を聞きながら、沙帆子は化学室に入った。

「あー、今日が最後なんだよなあ。なんか切ねえかも」

「わたしなんて、もう一回、二年生やりたいくらいだし」

「ほんと楽しかったよね。佐原先生の授業」

「うん。俺が化学をこんなに楽しいと思えたのは、やっぱり、佐原先生だったからなんだよな」

化学室のあちこちで飛び交う言葉に、どうにも胸がいっぱいになってしまう。

壁の向こう側にいるだろう先生に、みんなの言葉を伝えたい。

始業のベルが鳴り始める。知らぬ間に立ち止まっていた沙帆子は、席に急いだ。

最後なんだ。……本当に……

3 揃ったため息

自分の席に着く前に、沙帆子は机の上に置いてあるプリントを見つめた。

これ、同じだ。

佐原先生の初めての授業のときにも、こんなふうプリントが裏返しで置いてあった……

プリントに指先で触れたとき、ドアが開く音が聞こえ、沙帆子はハツとして顔を向

けた。

啓史が教室に入ってくる。彼の姿を見て心臓が大きく跳ねる。焦った沙帆子は思わず顔を伏せた。

ここで目を合わせたからって、別に構わないのに、どうしても顔を逸らしてしまう。だって、恥ずかしいし、どんな顔をすればいいのかわからないんだもの。

けど、今日が最後なのよ。この時間をしっかり味わっておかないと、あとになって後悔しちゃう。

この先、化学室で、生徒として啓史の授業を受けることは、もうないのだ。

神聖な気持ちになり、沙帆子は「起立」という掛け声に合わせて立ち上がった。

俯いたままだった彼女は、思い切って顔を上げ、啓史を見つめた。一瞬だけ、ふたりの目が合う。そのことに特別なものを感じて、沙帆子は胸を膨らませて頭を下げ、そして着席した。

「このクラスでの授業も、今日が最後だな」

静まり返った教室に、啓史の声が響く。沙帆子は胸がジーンとした。

「四月、一番初めの授業で、俺は君たちに、化学に対する意識調査として、化学について思うこと、化学の授業への要望について書いてもらった」

「そうでしたね」

懐かしそうに言ったのは天野だった。明朗快活な彼は、千里と並んで、このクラスのリーダー的存在だ。みんな、天野の言葉にしんみりとして頷いている。

「机の中央に置いてあるプリントを、各自取って」

その言葉に、沙帆子は思わず微笑んだ。

一番最初の授業で、佐原先生が口にしたのと同じだ。

あれから、もう一年が過ぎようとしているんだ。

「榎原さん」

右隣の男子生徒がプリントを手渡してきた。

「ありがとう」

お礼を言っ、プリントに目を通す。それは沙帆子が一年前に書いた、意識調査の用紙だった。

さっと目を通し、頬が赤らむ。わたし、こんなこと書いてたんだ。

そういえば、詩織……

沙帆子は視線を詩織に向けた。

思った通りだ。手に持ったプリントを見つめた詩織は、とんでもなく苦い顔をしている。化学は好きじゃないから、寝ないように気を付けようとかなんとか、とんでもないこ

とを書いているはずで……

思い出した沙帆子は、思い切り噴き出しそうになってしまい、慌てて口を押さえた。詩織の隣に座っている千里を窺うと、沙帆子と同じことを思い出しているようで、詩織に目を向けて笑いを堪えている。

沙帆子は周りに視線を巡らしてみた。みんな、自分が書いた言葉を読み返し、様々な反応を見せている。

「一年間……」

啓史が口を開く。全員プリントから顔を上げ、啓史に注目する。

沙帆子は胸がいっぱいになった。

白衣姿の佐原先生……決して忘れることのないように、脳裏にしつかりと焼きつけておこう。

「俺の授業を受けて、一年前と比べて、化学に対する意識に変化があったのか、自分の要望は多少なりとも満たされたのか……正直な思いを書いてほしい。十分でいいか？」

「佐原先生、このあと、実験もするんでしよう？」

「ああ。いくつか用意した。全部できるかわからないが……」

「全部やりたいです」

「十分で書こうぜ、みんな」

それらの言葉に呼応して、「おーっ」という掛け声が一斉に上がった。

すぐさま、全員がプリントに向き直り、真剣に書き始める。もちろん沙帆子もだ。

おかしなくらい心臓がドキドキし、高揚感を覚える。

啓史を慕って、クラス全員がまとまっている。それを強く感じるからだろう。

沙帆子は自分の書いた文字を読み返し、笑みを浮かべた。

一年前の自分は、『化学について思うこと』という問いに対して、『面白そう、とても興味深い』と書いている。要望に対しては、『実験がたくさんあったら楽しそう』と……

佐原先生の授業は、本当に面白かった。そして、化学というものに対して、とても興味を掻き立てられた。

沙帆子は、思いつくままに白紙のスペースを文字で埋めていった。そうしながら、過去を思い返す。

何度目かの授業のときに、佐原先生に叱られた。あのときはもう、泣きたいほど自分が情けなくて……

あらかじめ、実験には全員で参加するようになると言われていたのに、沙帆子は何ひとつ手伝わず、言われたことを守れなかった。……けれど、あのとき厳しい指摘とともに叱ってもらえたおかげで、そのあとはちゃんと実験に参加できるようになったのだ。

あの日、わたしは、佐原先生をもっと好きになった。

先生は、常にクラス全員に目を配り、必要なときに、一番適切な言葉をかけてくれる。本当に尊敬できるひとだ。

沙帆子は口元に笑みを湛え、啓史に叱られたときに自分が感じたこと、実験に参加することの大切さ、そして参加することで味わった楽しさを、心を込めてしたためた。

十分後、プリントを提出し、全員お待ちかねの実験に取りかかる。

今日の実験は、これまでで一番面白いかもしれない。みんな生き生きした顔で実験に取り組んでいる。

啓史は順番に班を回り始めた。いずれ沙帆子の班にもやってくるだろう。ドキドキしながらそのときを待っていたが、詩織が過剰に反応し、余計な合図を送ってくる。困っていたら、千里がそれに気づき、しっかりと制裁を加えてくれ、ありがたいことに詩織はおとなしくなった。

啓史が隣の班までやってきた。そうなるともう、ちらちら見ることもすらできなくなり、沙帆子は実験に心算を注いだ。

すっと白いものが視界を掠めた。ドキッとした瞬間、啓史の白衣が触れるほど側にあった。詩織が意味ありげな眼差しを向けてくる。沙帆子が焦る間もなく、千里が詩織のわき腹に、強烈な肘鉄を見舞う。詩織は痛みにも目を剥いたが、沙帆子は、もう詩織に構っていられなかった。

きゃーっ、佐原先生の白衣がわたしの腕に触れてるんですけど！

「どうだ。うまく進んでるか？」

「はい。いい感じですよ」

「佐原先生、この実験面白いですよ」

「天野、どんなところが面白いのか聞かせてくれるか？」

啓史が興味を見せて聞くと、天野は待ってましたとばかりに口を開く。

「物質の変化っぷりです。化学反応を起こして、まったく別物になるってのが、なんとも不思議で……」

すると千里も話に加わる。

「すべては原子からなっていて……わたしたちの身体も原子の集合体で作られていて……原子間の結合、そして切断によって、異なる物質になるとか……理屈ではわかっても、実感できなかつたのが、先生の授業を受けて、少しですけど実感することができた気がします」

「そうそう、燃えて灰になったら、なんでもめっちゃめちゃになりそうなものに、原子はそんな状況でも結合したり切断したりするだけで、損なわれたりしないとかさ……なんか考えるとすっげえよな」

天野は瞳をキラキラさせて熱弁をふるう。そんな天野を啓史は嬉しそうに見守って

いる。

先生、ほんと嬉しそう。化学の面白さをわかってもらえて、すつごく嬉しいんだろうなあ。

あー、わたしも何か意見を言えたらいいのに……胸にあっても、口に出す勇気がない。「榎原」

勇気のなさを嘆いていたら、突然啓史に呼びかけられ、沙帆子はぎよつとして顔を上げた。

ふたりの目が合い、動揺した沙帆子は「は、はいっ」と返事をし、思わず姿勢を正す。そんな沙帆子を見て、啓史は笑いを堪えているようだ。

わ、笑われちゃったよお。

「どうだ実験は？ 楽しめているか？」

「た、楽しめています。とても楽しいです」

あつ、楽しいって二度言っちゃった。恥ずかしい！

「そうか。よかった」

啓史は他の生徒にも声をかけていく。わたしだけじゃなかったんだ、と思わず苦笑いしてしまう。

なーんだ。びっくりしちゃった。

先生、最後の授業だから、全員に声をかけて回ってたんだ。それでも、佐原先生が側に来てくれて凄く嬉しかったし、これまで以上に思い出深い授業になったのは間違いない。

用意されていた三つの実験が終わる頃、授業終了のベルが鳴った。

沙帆子は残念な気分のため息をついたが、同時に、大勢がため息をついた。見事なため息が揃ったことにみんな驚き、次の瞬間、どっと笑いが起こった。

沙帆子も笑いながら、啓史に視線を向けた。

やっぱりだ、佐原先生も笑ってる。

楽しそうな啓史を見て、沙帆子は胸がきゅんとした。満ち足りた気持ちなのに、もう終わりのなのだと思うと、寂しくて仕方がない。

「さあ、片付けろよ」

軽く手を叩き、啓史が急かす。

「熊谷先生が二組の教室にやってきても、部屋は空っぽってことになるぞ」

「先生、それ面白いですよ」

「熊谷先生は面白いだろうか」

くすくす笑いながら、啓史が冗談めかして切り返し、また新たな笑いで教室が満ちた。胸に色々と思うことがあったと思うが、全員キビキビ動き、五分ほどですべて片付

いた。

「終わったな。それじゃ……」

啓史は教室を見回し、授業終了の号令を待つ。けれど、室内は静まり返ったままだった。

「どうした？」

「先生」と天野がさっと立ち上がった。

「先生の授業、本当に楽しかったです。僕ら全員、そう思ってます」

天野の隣の千里も、すっと立ち上がる。

「化学が楽しいってこと、教えてくださって、本当にありがとうございます」

すると、みんなも椅子から立ち上がるなり、めいめい「ありがとうございます」とお礼を言い、そして着席する。

沙帆子もそれに倣った。

啓史は困ったように顔をしかめ、頭に手を置きながら、「参ったな」と呟く。

「悪いが、普通に終わらせてくれ……どんな顔していいやらわからん。だいたいお前たち……まだ卒業じゃないんだぞ。俺の授業を受けないとしても、まだ顔を合わせるんだぞ……」

「授業を受けられないのが寂しいんですよ」

男子生徒が、涙声で叫ぶ。

「ありがとな」

啓史はほつりと言った。そして笑みを浮かべ、全員を見回す。

「君らには、いい経験をさせてもらった。本当にありがとう。さあ、熊谷先生が待つてるぞ」

「きりーつつ」

みんなが踏ん切りをつけられずにもぞもぞしているところに、その声は響き渡った。千里だ。

全員が姿勢を正し、「ありがとうございました」と大きな声を揃える。

教科書を手を、めいめい席を離れ始めた。

そのとき、「せ、先生」と女子生徒が声をかけた。啓史に思いを寄せている女子生徒だ。結婚のことを聞いたときも、彼女はひどく泣いていた。

「なんだ？」

啓史はやさしく返事をした。

「あの……先生の、お、奥様……ど、どんなひとなんですか？」

彼女がその問いを口にするために、どれだけ勇気を振り絞っているのか、はつきりと伝わってくる。

啓史は口を開きかけたが、口を閉ざし、女子生徒を見つめる。啓史に見つめられた女子生徒は、顔を赤らめて顔を伏せてしまった。

お、奥様って……わ、わたしのこと……なんだよね？
うわーっ！ 先生、なんて答えるんだろう？

あつ、でも……答えないんじゃないかな？ プライベートなことだから……
「そうだな……一言で言うと……」

啓史の言葉に、沙帆子は驚いて顔を上げた。

ええっ、答えるの？ わたしのこと、どんなひとだって答えるつもり……

「ちびだな」

その答えに、クラス中がずっこけた。もちろん、無駄にドキドキしまくっていた沙帆子もずっこけた。

歯痒いことに、千里と詩織は確かにと言わんばかりに頷きながら、沙帆子を見てにやついている。

「もおっ、先生。わたしは真面目に聞いたのにい」

赤らんだ顔で、質問した女子生徒は頬を膨らませて文句を言う。

教材を取った啓史は、笑いながら教壇から降りた。

ブリーングの嵐の中、啓史は振り向くことなくドアの向こうに消えた。

もう誰も何も言わなかった。みんな黙って化学室を出ていく。質問した女子生徒の表情も暗れ暗れとしていて、沙帆子はそれが嬉しかった。

……終わったんだ。化学室を出る瞬間、沙帆子は心の中で呟いた。

「沙帆子」

千里が呼びかけてきた。詩織も笑みを浮かべて沙帆子の横に並ぶ。

沙帆子はふたりに頷き、待ちぼうけを食らっているだろう熊谷の待つ教室へと急いだ。

4 不可能な想像

二年二組の生徒たちは、一斉に自分たちの教室に雪崩込んでいった。待ちぼうけを食わされていた熊谷は、怒涛のように戻ってきた生徒たちに苦笑していた。

ホームルームが終わり、沙帆子は急いで帰り支度を始めた。今日はこれで下校できる。残らなければならぬのは、今日が三者面談の生徒だけだ。

ああ、なんだかうきうきしてきちゃうな。千里と詩織と一緒に、榎原の家に行くんだ。通学靴を持ち、立ち上がった沙帆子は、千里と詩織に目を向けた。ふたりとも、もう立ち上がっている。三人は頷き合い、外へと出た。

携帯を確認すると、美美子からちゃんと返事が届いていた。(学校が終わったら電話して)とある。

沙帆子はさっそく電話してみた。

「はい、沙帆子。いいタイミングだわ。ねえ、ふたりはお昼に何が食べたいかしら？」

「ママが、お昼に何が食べたいかって？」

千里と詩織に尋ねる。

「なんでもいいよ。美美子ママの作る物は、なんでも美味おいしいもの」

「まあ、千里ちゃん、嬉しいことを言ってくれるじゃないの」

伝えずとも、声が届いたらしい。

「それじゃ、スーパーを回りながら何にするか考えるわ。ちょうどいま買い物に出てきてるのよ」

「そうなの」

「学校までそんなにかからないし、そっちに迎えにいつてあげるわ。でも、まだ買い物が残ってるから一時間くらい待ってもらうことになるけど、それでいい？」

「ちょっと待ってね」

沙帆子はふたりのほうを向いた。

「ママ、いま買い物中なんだって。一時間後にここに迎えに来てくれるそうだけど……

それでいい?」

「もちろん」

ふたりが笑いながら、同時に叫ぶ。沙帆子は笑い返し、「それでいいって」と母に返事をした。

「それじゃあ、一時間後ね」

通話を終えて携帯をポケットに戻そうとした沙帆子は、ハッとしてもう一度携帯を開いた。

危ない危ない。サイレントモードを解除しておこなきや、また叱しかられちゃう。

「それじゃあ、これからどうする?」

詩織がふたりに聞いてくる。

「自販機で飲み物でも買って、秘密の場所か……生徒会室で時間潰すのでもよくない?」

「秘密の場所がいいよ。そっちのほうが、校門まで近いし……」

詩織の意見に、千里が頷うなずく。

「それじゃ、そうしよう」

話がまとまり、三人はいつもの自販機に向かった。

校舎から通路に出たところで突風が吹きつけてくる。

「うひゃーっ、思ったより風が冷たいね」

曆こよみの上ではもう春とはいえ、確かにちよつと寒い。沙帆子も思わず肩をすぼめた。

「こりゃあ、一時間も外のベンチに座つてられないかな」
情けない顔で詩織が言う。

「だね。生徒会室のほうがよさそうだね」

沙帆子も財布を取り出し、飲み物を買おうとしていたら、メールが届いた。慌あわてて確認してみたら、啓史からだ。

サイレントモード、解除しといてよかったあ。おおいに安堵あんどする。

「芙美子ママから？」

「ううん。……啓ちゃん」

照れつつ答える。

「啓ちゃん、なんだって？」

「いまだこだ、って」

沙帆子は答えながら、自販機のところにいると返信した。十秒も待たずにまたメールが届く。

「お茶を買ってきてくれって」

「そうか。なら、わたしたち先に生徒会室に行つとくから」

「うん」

沙帆子はあつたかいお茶を買い、自分用にはリンゴジュースを買った。

「それじゃ、あとでね」

ふたりに手を振り、沙帆子は啓史のところに向かう。

慣れた手つきで、通学鞆かばんを穴の向こうに放り投げ、ブレザーのポケットにリンゴジュースとペットボトルのお茶を入れ、四つん這はいになって穴をくぐる。穴から顔を出した沙帆子は、啓史の部屋に目を向けた。思った通り、啓史は窓を開けて沙帆子を見ていた。思わずむっとしてしまふ。笑つてはいないが、面白がっているのはつきりと伝わってくる。

穴から這はい出た沙帆子は、膝の汚れを払い落とし、鞆を取り上げて啓史に歩み寄った。

「そうやって、見学ひそするのやめてください」

声を潜めて文句を言う。

「見学？」

なんのことだともいうように、しらじらしく答える口元が、微妙ににやついている。

「はい、お茶です」

沙帆子はペットボトルを渡した。

「ほら」

ペットボトルを受け取った啓史は、通学鞆を受け取ろうと手を差し出して来る。

「あつ、これから生徒会室に行かなきゃならないから……」
 そう告げると、啓史の眼差しが鋭くなった。

「生徒会室？ 生徒会の仕事の手伝いを頼まれたのか？」
 不機嫌そうな声音に、沙帆子は気まずくなる。

「いえ、そうじゃなくて……」

生徒会室ってことは、言わないほうがよかったかな。

あそこは、生徒会役員である広澤が頻繁に出入りしている場所だ。きつと、それで機嫌を悪くしてしまったのに違いない。まずいなあ。

「あの、今日、千里と詩織が榎原の家に一緒に行くことになったんです」

「そうなのか？」

「はい。それで、ママに伝えたら、いま買い物中らしくて、一時間後に車で迎えに来てくれることになったんですけど、時間を潰すのに外は寒いから生徒会室がいいって、千里が」

「なら、ここに連れてくればよかったのに」

「えっ、そうですか？ あつ、でも、もう先に行っちゃったから……」

「お前はここで時間を潰せばいい。ふたりとは一時間後に校門で落ち合えば問題ないだろう？ それとも、何か問題があるのか？」

「い、いえ……もちろん、ありません」

もちろんここで時間を潰すことに異論はないが、あつたとしても異議を唱えられる雰囲気ではなかった。

通学鞆を渡し、啓史にすくい上げてもらう。

部屋に入った沙帆子は、テーブルの上にコーヒーがふたつ用意してあるのに気づいた。嬉しさが込み上げる。

先生、わたしの分のコーヒーを淹れて、待っていてくれたんだ。

カップの隣には、蓋を開けたお弁当が置いてある。わたしが作ったお弁当だ。

そう考えると、胸がくすぐったい。

「飯沢たちにメールしておけ」

啓史の指示に頷き、沙帆子は一時間後に校門で落ち合おうと、千里にメールをした。すぐに（了解）との返事がきた。

「座らないのか？」

すでにソファに座っていた啓史が、自分の隣を軽く叩きながら言う。

「は、はい」

ついさっきまで、啓史の授業を受けていたためか、なんとなく緊張してしまう。

うわーっ、先生の隣に座らせてもらえるなんて……いいのかな？

そういえば、先生、もう白衣を脱いじゃってる。着てくれたら、思い切ってぎゅつと抱きついて……そうしたら、ご褒美を使わずに望みが半分は叶っちゃったのに。そんなことを考えながら、ちょこんと座った途端、沙帆子は啓史に抱きしめられていた。

びっくりした沙帆子は、小さく跳ねた。

「せ、先生?」

「授業、終わっちゃったな」

「は、はい」

しんみりと言われ、沙帆子も寂しくなる。

「最高の授業でした。みんなの心に、一生残るような」

「さすがにそれは、評価が高すぎだろう」

「そんなことありません。いっぱい授業受けて来たけど……終わってほしくないって心の底から思うことってないです。でも、さっきはそう思いました。みんなもわたしと同じです」

「そうか。それじゃ、素直に受け取っておくかな」

「はい」

元氣よく返事をし、啓史の顔を見つめる。

「授業中に先生から話しかけられて、心臓がでんぐり返るくらいびっくりしました」
「そうなのか?」
啓史はくすくす笑う。その笑い声が胸に響き、なんともくすぐったい。

「わたしも千里や天野君みたいに、意見を言いたかったけど、結局言えなくて……残念でした」

「そう思うことが大事だぞ」

「そう……ですか?」

「ああ。みんなの意見を聞いて、心の中で自分の意見をまとめる。それができれば参加しているようなものだ。自分の中で意見を消化することが重要なんだ。意見を聞いて、そうなんだと、ただ流すようでは何も残らない」

「そうなんですね。なんか、胸にストンって落ちました。先生って、やっぱり凄いです」

「俺は別に……まあ、いいか。ありがたく受け取っとくか」

いったんは首を横に振りかけた啓史だったが、考えを改めたようで、嬉しそうに微笑んでくれた。

「はい。受け取ってもらえて嬉しいです」

頷いた啓史は、沙帆子の瞳を覗き込んでくる。あまりに真剣な目で見つめられ、心臓